

氏名 藤 田 祥 代
学位の種類 博士 (文学)
学位記番号 甲 第 5 5 号
学位授与の日付 2014 年 3 月 18 日
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項 該当
学位論文題目 **女性推理小説家の伝統**
—A. K. Green から P. D. James まで—

学位審査委員 主査 教 授 横 田 和 憲
副査 教 授 田 村 章
副査 教 授 小 松 史生子

論文内容の要旨

推理小説の歴史において、革新的な女性推理小説家たちが、この分野の発展に偉大な貢献をした。1878 年のアメリカでは、エドガー・アラン・ポオ (Edgar Allan Poe) に続く推理小説家、アンナ・キャサリン・グリーン (Anna Katharine Green, 1846~1935) が登場した。『リーヴェンワース事件』 (*The Leavenworth Case*) は、アメリカ人の女性の手によって書かれた最初の推理小説であり、グリーンは欧米の女性作家にとって特に重要な存在になった。グリーン作品は文学的に非常に優れているというわけではないが、プロットは綿密に構成されており、現代の推理小説に劣らない基準であり、後の作家たちに与えた影響は大きい。

一般に、第一次世界大戦から第二次世界大戦の間は、イギリスの推理小説の黄金時代と言われている。この時代を代表する女性推理小説家は、アガサ・クリスティー (Agatha Christie, 1890~1976) とドロシー・L・セイヤーズ (Dorothy Leigh Sayers, 1893~1957) である。クリスティーは純粋かつ複雑な謎解きを提供し、推理小説の醍醐味を読者に伝えた。一方、セイヤーズは推理小説の醍醐味を含ませながらも、登場人物の性格描写に深みを加え、推理小説を文学的に価値がある小説であると見なされるようにした。さらに、クリスティーはエルキュール・ポアロ (Hercule Poirot) というベルギー人の私立探偵を、セイヤーズはピーター・ウィムジイ卿 (Lord Peter Wimsey) という貴族探偵を創造した。30 年代に入ると、クリスティーがミス・マーブル (Miss Marple) という老婦人を、セイヤーズがハリエット・ヴェイン (Harriet Vane) という推理小説家を創造し、探偵として活躍させることで、女性が推理小説の主役になり得るという可能性を広げた。クリスティーとセイヤーズは共に「ミステリーの女王」であり、その称号は、現代の P・D・ジェイムズ (Phyllis Dorothy James, 1920~) に受け継がれている。ジェイムズの作品では、伝統的な推理小説

の趣を残しつつ、複雑で重厚な人間関係の謎を追究している。

本論では、推理小説というジャンルにおいて、卓越した功績を残した A・K・グリーン、アガサ・クリスティー、ドロシー・L・セイヤーズ、P・D・ジェームズの作品を分析しながら、クリスティーへの考察を中心に女性推理小説家の伝統の系譜を精査し再検討する。

第一章では、『リーヴェンワース事件』を中心とする A・K・グリーンの作風を分析して、アガサ・クリスティーがグリーンから受けた影響を考察する。『リーヴェンワース事件』は、幼い頃から老年に至るまで、クリスティーの愛読書だった。この作品には、遺言状を書き直そうとした途端に殺される大富豪、書斎の死体、医学的証拠や検視官による死因調査、犯行現場の見取り図や引き裂かれた文書の断片による証拠など、後の推理小説では定番になっている特色がすでに取り入れられている。これらは、多くのクリスティー作品にも見られる特色である。

しかし、クリスティーとグリーンの作品から見て取れる最も大きな共通部分は、探偵の多様性である。グリーンは『リーヴェンワース事件』で、青年弁護士エヴァレット・レイモンド (Everett Raymond)を語り手にして、ニューヨーク市警の警部エベニザー・グライス (Ebenezer Gryce)の活躍を描いた。一方、クリスティー作品を代表する探偵エルキュール・ポアロの活躍は、主に友人のヘイスティングズ大尉(Captain Hastings)によって記録される。クリスティーは、ポアロとヘイスティングズは、アーサー・コナン・ドイル (Arthur Conan Doyle)のシャーロック・ホームズ (Sherlock Holmes)とワトスン医師 (Dr Watson)のコンビという伝統に従って創造したと述べているが、ホームズが登場する 11 年前に、グリーンは『リーヴェンワース事件』でグライス警部とレイモンドを登場させている。グリーンが築いた「グライス警部とレイモンド」という探偵コンビは、「ホームズとワトスン」へと継承され、さらに「ポアロとヘイスティングズ」へと受け継がれたのである。

そしてクリスティーは、1926年に発表した『アクロイド殺し』(*The Murder of Roger Ackroyd*)によって、イギリスを代表する推理小説家の地位を築いた。この作品は、語り手であり、探偵ポアロのワトスン役を務める人物が殺人犯人であるため賛否両論の評価をされた。『アクロイド殺し』で使われた記述のトリックは、その後、『そして誰もいなくなった』(*And Then There Were None*)、『終りなき夜に生れつく』(*Endless Night*)、『カーテン』(*Curtain*)などで発展されていった。

短編集『おしどり探偵』(*Partners in Crime*)では、トミー(Tommy)とタペンス(Tuppence)という夫婦が、ドイルのシャーロック・ホームズや R・A・フリーマン(R. A. Freeman)のソーンダイク博士(Dr. Thorndyke)、G・K・チェスタートン(G. K. Chesterton)のブラウン神父(Father J. Brown)、バロネス・オルツィ(Baroness Orczy)の「隅の老人」(*The Old Man in the Corner*)、さらにはクリスティー自身の創造したエルキュール・ポアロなど、推理小説に出てくる名探偵たちのスタイルを模倣して事件に取り組む。クリスティーは幼い頃から、様々な推理小説を愛読していた。推理小説界の巨匠たちが創造した名探偵たちと、自らが生み出したエルキュール・ポアロを客観的に比較するため、さらに、ポアロも他の

偉大な名探偵たちと同様の探偵であることを証明するために、クリスティーは『おしどり探偵』を書いたのではないだろうか。

第二章では、クリスティーとドロシー・L・セイヤーズの作品を比較した。クリスティー作品の特徴は、シンプルな描写とわかりやすいストーリーであり、会話文が多い簡潔で明瞭な文章である。また、トリックやプロットは専門知識を必要としない。クリスティー作品では殺人の残酷さや恐ろしさよりも、誰がどのような方法で犯行に至ったのかという知的な好奇心が強調されているのである。一方、セイヤーズは謎やトリックだけでなく、心理や性格を導入して、文学的な小説に近づけようと試みた。すなわち、推理小説を風俗小説の方へ向かわせたのである。しかしながら、セイヤーズ作品では、本筋とは無関係な会話や描写が長々と続く事が多い。推理小説とは、謎が提示されてから真相が明らかにされるまでを明確に読者に伝えなければならない。そのため、余計な脱線で読者の気をよそへ運んではいけないのである。つまり、会話が多い簡潔で明瞭な文章を書き、殺人過程の方へ興味を持たせる知的な好奇心に駆られることができるクリスティー作品は、推理小説として良質であると言える。そういうわけで、ミステリーの女王という名は、クリスティーの方がふさわしいのである。

セイヤーズはクリスティーの『アクロイド殺し』を高く評価したが、クリスティーのセイヤーズに対する評価はどこにも見当たらない。しかしながら、いくつかのクリスティー作品には、クリスティーがセイヤーズ作品を読んでいと証明できる部分がある。『エッジウェア卿の死』(*Lord Edgware Dies*)や『杉の柩』(*Sad Cypress*)には、セイヤーズのピーター・ウィムジイ卿を意識した人物が登場する。また『杉の柩』とセイヤーズの『毒を食らわば』(*Strong Poison*)には、いくつかの類似点がある。さらに、セイヤーズが自らをモデルにしたハリエット・ヴェインという女性推理小説家を創造したのと同様に、クリスティーもアリアドネ・オリヴァ夫人(Mrs. Ariadne Oliver)という中年の推理小説家を創造した。このように、クリスティーはセイヤーズの作品を読み、多くのインスピレーションを沸かせたことが分かる。クリスティーは自分流のスタイルを貫きながらも、セイヤーズを賞賛していたのだ。

第三章では、グリーン、クリスティー、セイヤーズ、ジェームズの作品に登場する女性探偵を、「職業探偵(男性)を補佐する素人探偵」、「職業探偵」、「夫婦探偵&名探偵とその恋人」という3つのグループに分類して、女性推理小説家による女性探偵の変遷を論じる。

グリーンは、1897年に、グライス警部の協力者として、アメリア・バターワース (Amelia Butterworth)という年配の独身女性を創造した。バターワースは、クリスティーのミス・マーブルのような老婦人の素人探偵の先駆けとなった。クリスティーは他にも、オリヴァ夫人やルーシー・アイルズバロウ(Lucy Eyelesbarrow)という素人探偵を創造した。

職業探偵として、グリーンはヴァイオレット・ストレンジ (Violet Strange)というお金を稼ぐことを目的に私立探偵をしている若い女性を登場させたが、現代の女性の私立探偵

の先駆けとなったのは、P・D・ジェームズのコーデリア・グレイ(Cordelia Gray)だと言える。コーデリアは探偵事務所を経営していたバーニイ・プライド(Bernie Pryde)に雇われ、バーニイに探偵として仕込まれて共同経営者をしていた。バーニイの自殺後、周囲からは、探偵は女性には向かない職業だと言われるが、コーデリアは1人で事務所を継ぐ決意をした。22歳の若き女性が、1人で事件捜査を進めていく健気な姿が読者に共感や好感を与えているため、コーデリアが登場する作品は『女には向かない職業』(*An Unsuitable Job for a Woman*)と『皮膚の下の頭蓋骨』(*The Skull Beneath the Skin*)の2作のみであるにもかかわらず、コーデリアはジェームズ作品を代表する探偵となる。

「夫婦探偵&名探偵とその恋人」を代表する探偵には、クリスティーのトミーとタペンス、セイヤーズのピーター・ウィムジイ卿とハリエット・ヴェインが挙げられる。タペンスとトミーは常に対等の立場で、互いの能力を発揮し合い、互いの欠点を補ってきた。一方、ハリエットとウィムジイは、『死体をどうぞ』(*Have His Carcase*)では同等の捜査能力を見せるが、『学寮祭の夜』(*Gaudy Night*)では、ハリエットに依頼された内容が自分だけでは手に負えず、ウィムジイの協力を求めずにはいられなかった。つまり、ここでハリエットはワトスン的な役割に徹している。

推理小説の中での女性探偵は重要な存在になっている。この流れを築いたのが、A・K・グリーン、アガサ・クリスティー、ドロシー・L・セイヤーズ、P・D・ジェームズの4人であると言える。

P・D・ジェームズは、コーデリア・グレイの他にも、『わが職業は死』(*Death of An Expert Witness*)のブレンダ・プリッドモア(Brenda Pridmore)や、『原罪』(*Original Sin*)のマンディ・プライス(Mandy Price)という若い女性を登場させた。ブレンダやマンディは探偵役ではないが、殺人事件に関わったことで「死」について学び、人間的成長を遂げた。このような精神的成長こそ、論理的な推理力や行動以上に、探偵に必要な質なのではないだろうか。それゆえ、ブレンダやマンディのような女性像は探偵にふさわしいと言える。

P・D・ジェームズは、ジェイン・オースティン(Jane Austen)、クリスティー、セイヤーズから特に影響を受けた。ジェームズの作品では、クリスティー風の伝統的な推理小説の形式を取り入れながらも、オースティンの『エマ』(*Emma*)のように、人間の心理を謎とし、主人公の自己認識を物語の主題としている。ジェームズに最も影響を与えたのはセイヤーズであり、セイヤーズの作品は、謎解きから次第に社会的な現実性へと主題が移行し、その後の推理小説が発展する基盤を築いた。ジェームズはセイヤーズから、推理小説では殺人事件や死体を物語の中心にする必要は無く、社会的な問題を提示して、芸術的統一を達成する事が可能であることを学んだ。

アガサ・クリスティーの後継者と呼べる現代の女性推理小説家は、キャロリン・G・ハート(Carolyn G. Hart, 1936~)である。ハートは、アニー・ローランス・ダーリング(Annie Laurance Darling)という、ミステリー専門書店の経営者を主人公とした作品を多く出版している。これらの作品の登場人物は、好奇心旺盛な若い女性と、彼女に協力する夫、詮

索好きな婦人など、クリスティー作品を意識した人物設定になっている。物語も、殺人事件が起こり、被害者を嫌っていた人物が多数登場し、最後に名探偵が鮮やかな推理を披露し、混乱していた秩序が回復するという、まさに「アガサ・クリスティー風の推理小説」である。また、ハートは作中の登場人物たちの言葉を通して、クリスティーへの敬愛を示している。

特にハートは『クリスティー記念祭の殺人』(*The Christie Caper*)を通して、現代の世界を理解したいのなら、クリスティーを読むべきだと読者に伝えている。クリスティーの作品世界こそ、本当の現実である。クリスティーが描く人物は、誰もが知っている人物であり、良識ある人間だったのにも関わらず、悪魔に心を開いてしまった心の弱い人間が必ず登場する。推理小説とは、犯罪が始まりの物語ではなく、犯罪者になる動機を持ってしまった人間と、その人物が陥った深い闇が中心となる小説である。この特色は、セイヤーズとジェームズの作品にも共通する。推理小説には、人間の心理の複雑さが描かれているのと同時に、犯罪者や犯罪の手段を暴くという楽しみが加えられている。この2つを贅沢に味わえる1番の推理小説家がアガサ・クリスティーなのである。クリスティーたちが築いた土台を基礎にして、今後もキャロリン・G・ハートを始めとする多くの優秀な女性推理小説家がこの伝統を守り続けるだろう。

審査結果の要旨

本論文は、推理小説というジャンルにおいて、その発展に大きな貢献をした4人の革新的な女性推理小説家たち、グリーン (Anna Katharine Green, 1846-1935)、クリスティー (Agatha Christie, 1890-1976)、セイヤーズ (Dorothy Leigh Sayers, 1893-1957)、ジェームズ (Phyllis Dorothy James, 1920-) の作品を分析しながら、クリスティーへの考察を中心に女性推理小説家の伝統の系譜を真摯に精査し、再検討した研究である。

本論文は、序論、三章から成る本論、結論、参考文献で構成され、英文のシノプシスを添えて、A4サイズ270(400字詰め原稿用紙で約500)枚に及ぶ。本論文の概略は以下のとおりである。

序論において先ず、アメリカのエドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe, 1809-1849) の短編推理小説に端を発し、イギリスやフランスで進化を遂げた推理小説の歴史を検証し、続けて、グリーン、セイヤーズ、ジェームズ、そして現代にまで多くの読者に読み継がれているクリスティーについて言及する。

本編は、第一章「Agatha Christie と A. K. Green」、第二章「Agatha Christie と Dorothy L. Sayers」、第三章「Agatha Christie と P. D. James」から成る。第一章では、クリスティーがアメリカのグリーンから受けた影響について、またクリスティーの描写の巧みなテクニックや、クリスティーが『おしどり探偵 (*Partners in Crime*, 1929)』で描いた、シャーロック・ホームズを始めとする名探偵たちからのパステイッシュが考察される。クリスティーは幼少期から、グリーン『リーヴェンワース事件 (*The Leavenworth Case*, 1878)』を始めとして、実に多くの推理小説を精読していた。クリスティーの読書に対する情熱は作家になってからも続いており、同時代に活躍したセイヤーズや、アメリカのデイリー (Elizabeth Daly, 1878-1967) の作品も読んでいた事実を詳述している。

第二章では、クリスティーがセイヤーズの作品から多くのインスピレーションを得た事実について、考察を深めている。クリスティーの作品は、会話文を中心にした簡潔で明瞭な文章でもって、殺人方法やトリックの奇抜さや大胆さに基づいた謎解きを展開していく。一方セイヤーズの作品は、通常の推理小説としての要素を持ちながらも登場人物の描写に深みが増し、推理小説を文学として真剣に認められる地位にまで引き上げた。作風は異なるもののクリスティーがセイヤーズを賞賛していた事実が述べられる。

第三章では、クリスティー以上にセイヤーズを敬っていたジェームズが、セイヤーズの作品から、推理小説によって芸術的な統一性を達成することが可能であることを学んだ経緯が語られている。またジェームズの作品には、コーデリア・グレイを始めとする、自立した若い女性が登場する。好奇心旺盛で勇敢に行動できる女性像は、セイヤーズ作品のハリエットのみでなく、クリスティー作品のタペンスとも共通する人物像であり、現代の推理小説における自立した女性探偵の基盤を固めた。

さらに各章を各節ごとに精査してみたい。第一章の第一節「Christieの愛読書 *The Leavenworth Case*」では、「『リーヴェンワース事件』」、「Ebenezer Gryce [エベニザー・グライス] とHercule Poirot [エルキュール・ポアロ]」、「女性探偵」という区分けの下、クリスティーがグリーンの『リーヴェンワース事件』に見出される味わい深い雰囲気を読み、生涯にわたりグリーンに心酔し、その作品から様々な影響を受け、鼓舞された事情が語られる。

第一章の第二節「Christie 流テクニック」では、3つの区分け「*The Murder of Roger Acroyd* [『アクロイド殺し』]の慎重な記述」、「二つの意味と隠された真実」、「*And Then There Were None* [『そして誰もいなくなった』]での虚偽」において論述を進める。特に『アクロイド殺し』における、世界的に有名な叙述トリックを『そして誰もいなくなった』のレトリックに絡めながら指摘する。

第一章の第三節「Hercule Poirot のライバルたち」は、「巨匠たちからのパステージュ」、「Self-parody」という2つの区分けで構成されている。クリスティー作品を代表する探偵ポアロの活躍する物語は長編33本と短編55本であるのに対し、トミーとタペンスが活躍する物語は長編4本と短編15本と圧倒的に少ないものの、引退した元ベルギー警察官として登場し年配のままにいたポアロとは異なり、年齢を重ねるといふ現実味が与えられたトミーとタペンスが探偵としてのポアロの最大のライバルなのかも知れないことを示唆している。

第二章の第一節「Christie 作品の良質さ」では、「クリスティー作品の変化」、「セイヤーズ作品の特徴」、「クリスティー作品の特徴」という区分けの下、クリスティーの推理小説では、様々な文学作品からの引用が物語全体に深く係わり、主人公と被害者の存在を表現する大切な役割を果たしていることを指摘する。すなわち、他ジャンルの文学作品が推理小説を構成するトリックおよびナラティブのインターテキストとして使用され、引用が無関係な脱線に陥っていないことが重要とする。加えて、会話が多い簡潔で明瞭な文章によって、殺人過程の方へ興味を持たせる知的好奇心へ読者を誘導するクリスティー作品は、推理小説として良質であると断言している。

第二章の第二節「Christie の Sayers 批評」は、3つの区分け「*Lord Edgware Dies* [『エッジウェア卿の死』]の中の Lord Peter Wimsey」、「*Sad Cypress* [『杉の柩』]と *Strong Poison* [『毒を食らわば』]の類似性」、「作中の女性推理小説家」で構成されている。セイヤーズと同じスタイルで小説を書きたいと思っても、自分のスタイルではないので上手く書けないクリスティーが、自分流のスタイルを貫きながらもセイヤーズを賞賛していたことを提示する。

第三章の第一節「Green から James までの女性探偵の変遷」では、「Amateur Detectives」、「Professionals」、「The Couple Detectives」という区分けの下に言述を進める。プロ、アマを含め、現代推理小説の中で男性以上の行動力や推理力を持った重要な存在になっている女性探偵の基礎を築いたのが、グリーン、

クリスティー、セイヤーズ、ジェイムズの4人であることを検証している。

第三章の第二節「James 作品に登場するネクスト『コーデリア』たち」では、「コーデリア・グレイの役割」、「『わが職業は死』[*Death of An Expert Witness*, 1977]でのブレンダの場合」、「『原罪』[*Original Sin*, 1994]のマンディの場合」という区分けの下、推理小説に登場する探偵たちが死体に出会うことは必然的なのだが、ジェイムズ作品に登場する上記の3人の女性が、殺人事件に関わることで「死」について学び、人間的な成長を遂げる重要性を跡づけている。死を身近に見ながらも自分を見失うこと無く、逆に人間としての精神的な成長を遂げるのであって、この精神的成長こそが、論理的な推理力や行動以上に、探偵に必要な資質であることを示唆している。

第三章の第三節「James に影響を与えた作家たち」では、3つの区分け「Jane Austen [1775-1817]」、「Agatha Christie」、「Dorothy L. Sayers」において、ジェイムズに影響を与えたオースティン、クリスティー、セイヤーズの作品を分析する。ジェイムズの作品では、クリスティー風の伝統的な推理小説の形式を取り入れながらも、オースティンの『エマ』のように、人間の心理を謎とし、主人公の自己認識を物語の主題としていることに言及する。

以上の3つの章にわたる考察から、稿者は結論として、現代の女性推理小説家の中でクリスティーの後継者と呼べるのは、キャロリン・G・ハート(Carolyn Gimpel Hart, 1936-)であるとして、その女性探偵の造型およびインターテキストの点から、『クリスティー記念祭の殺人』(*The Christie Caper*, 1991)を評価している。

以上の三章にわたる考察が本論文の要旨である。クリスティーとセイヤーズとの比較検討、またクリスティーとジェイムズとの比較検討など多々、評価すべき論点が提示されているが、本論文の最も大きな貢献は、ミステリー性の尊重を標榜する動向についても配慮しながら、これまで長年にわたって研鑽を重ねてきた「クリスティーの魅力」の解明を中核に据え、アメリカのグリーンやハートを含めた観点から、女性推理小説家の伝統を確認し、広範な知識に基づいて再検討したことである。

しかしながら今後への課題が幾つか残る。基本的文献に関する言及の欠如、モチーフの分類作業から本質的な分析にまで考察が十分に浸透していない点を含め、全体的に論述が総花的になっている。ある程度は図式的になることを恐れず、具体的な場面を根拠にした検証が必要である。作品のストーリー紹介に紙幅が割かれすぎている面は否めない。作家を比較する上での論拠を明示するには、複数の作品を網羅的に取り上げての説得よりも、ある特定の登場人物の人物造形や特定の主題、例えば「語り手」をもとに、具体的な場面を引用して綿密に考察する必要がある。作家間の影響関係の考察には、客観性をもたせるための先行研究、自伝、書簡などによる裏付けが、さらに必要だ。英文の引用に続けて日本語で要約するパターンが目につくことも気にかかる。

これらの課題を踏まえた上で、なお、「推理小説には、犯罪者や犯罪の手段が暴かれる過程を読む楽しみと同時に、人間の心理の複雑さを堪能する楽しみもある。両者の醍醐味

を卓抜なトリック構成とストーリーテラーぶりで実現してみせたアガサ・クリスティーは、やはり推理小説の最大の貢献者である」と締めくくる結論は評価したい。

本論文ならびに最終試験で示された、稿者の推理小説そのものへの深い関心から、稿者には文学研究者として発展する可能性が見出された。稿者の今後のさらなる精進によって結実するであろう研究成果への期待も込めて、本学位審査委員会は、本論文を合格とすることが妥当であるとの結論に達した。